

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04069

研究課題名(和文) 児童期の社会的相互作用の特質と拡散的思考への効果：学童保育の異年齢集団に着目して

研究課題名(英文) Developmental characteristics of elementary school children's social interaction and its effect on their divergent thinking

研究代表者

寺川 志奈子 (TERAKAWA, SHINAKO)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：30249297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学童保育に在籍する児童を対象に、児童期の社会的相互作用の特質とその発達的变化、および社会的相互作用が子どもの拡散的思考に及ぼす効果について検討することを目的とした。3年生から5年生の同年齢、異年齢グループを対象に「夢の小学校」協同制作課題を実施し、また、学童保育場面における仲間関係について観察した。その結果、9、10歳頃に社会的相互作用の特質に発達的变化がみられること、社会的相互作用の活性化が拡散的思考を促すこと、および実験場面でみられた社会的相互作用と日常生活場面における仲間関係との関連が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research investigated how elementary school children's interactions with peer develop and affect their divergent thinking. From 3rd to 5th grade children in after-school childcare participated in producing work of "the school of dream" by group of 4 members with same grade in one condition, and by group of 4 members with different grade in the other condition. Peer interactions were observed in the process of "the school of dream" tasks, and also in daily after-school childcare. Longitudinal analyses showed that in the case of 3rd graders one member tended to lead other members in the task, whereas, in the case of 4th graders all members actively and equally participated in their own way. This developmental change in the task performance were observed consistently in their activities in daily after-school childcare. The results showed that children's activated interactions facilitated their divergent thinking.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会的相互作用 児童期 拡散的思考 仲間関係 学童保育

## 1. 研究開始当初の背景

児童期の仲間関係に関する研究は、幼児期や青年期に比べて非常に少ないことが指摘されている(平石, 2010)。その数少ない児童期の研究を概観すると、学級集団内の友人関係の認知について調査したもの(川端, 2003; 三島, 2003)や、ある仮定的な場面を想起させたときの友人関係について、たとえば友人に対する情動表出の程度(埴, 1999)や友人から相談を受けた時の対応の仕方(西田, 2000)の年齢差を検討したもの、あるいは友人関係のあり方と他の要因、たとえば適応との関連(三島, 2007)やストレスとの関連(山本ら, 2000)を検討したもの等がみられる。これらの研究は、質問紙法、面接法、自由記述法により、いずれも子どもの仲間関係に関する表象を探り出そうしたものと言えるが、現実場面の仲間関係において、子どもが実際にどのような行動をとるかということとの関連性は検討課題であると考えられる。

一方、ゲームあるいは課題を設定し、その遂行過程の観察を通して、主として仲間との協力、順番といったテーマで子ども同士の相互作用を検討しようと試みている研究もみられる(Muller, E. & Brenner, J., 1977 など、本郷, 1994 を参照)が、そのほとんどは幼児期を対象としている。児童期において子ども同士の相互作用を扱ったものとしては、教科教育の分野において協同学習の効果を検討した研究が増えつつあり(佐藤, 1996)、協同的な問題解決を行うことが思考の質を高め、個人の認知的変化に影響を及ぼすことが示されたりしている(須藤・安永, 2009; 権・藤村, 2004 など)。しかしながら、児童期における仲間関係の形成過程という観点から、子ども同士の相互作用を検討している研究はほとんどみあたらない。社会的相互作用の質的变化を捉えることは、仲間関係の発達的变化を測る指標になると同時に、様々な相互作用を経験するなかで、新たな質の仲間関係が形成されていくダイナミックな側面を持つと考える。また、子ども同士の相互作用について検討している研究の多くは、二者関係を対象としたものであり、より子どもの日常場面に近く、生態学的妥当性の高い状況で、三者以上の多者関係をいかに捉え、記述するかといった点については課題が残されている(本郷, 1994)。特に児童期の日常場面における社会的相互作用の特質については、今後の解明が期待される。

## 2. 研究の目的

本研究は、児童期における社会的相互作用の特質とその発達的变化、および社会的相互作用の特質が拡散的思考に及ぼす効果について検討することを目的とした。対象は異年齢集団のなかで生活や遊びを共にする学童

保育に通う児童である。同年齢、異年齢という集団の質による社会的相互作用の特質の差異が、9, 10 歳頃の発達の質的転換期を境としてどのように現れるのか、「夢の小学校」協同制作課題への取り組み、および学童保育場面における仲間関係の観察から明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 実験課題: 「夢の小学校」協同制作課題

自分たちが考える「夢の小学校」を協同で制作する課題を設定した。この協同制作課題は、協同学習において多く扱われているような1つの正解を目標とするような課題ではなく、自分たちが考える「夢の小学校」について表現するという、自由度が高く、拡散的思考が要求される課題であり、社会的相互作用が引き出されやすいと考えた。同性4人1組のグループで、個別にアイデアを考える(5分間)→ グループで作戦会議(5分間)→ 協同制作(30分間)

→ 制作結果について発表の手順で実施した。協同制作課題(1回約45分間のセッション)のプロセスは、5台のビデオカメラ、およびICレコーダーに記録し、社会的相互作用にかかわるプロトコルと行動について文字化して分析対象とした。

### (2) 学童保育における仲間関係の観察

実験課題で把握された社会的相互作用の特質が、実際の生活場面における仲間関係のあり方とどのように関連するかについて検討するために、対象事例を1グループとりあげ、学童保育における仲間関係の特質について縦断的に観察した。

### (3) 実験参加者

#### ・横断的研究の対象

学童保育の児童を対象に、3年生同性4人1組の2グループ(男女各1グループ)と5年生同性4人1組の2グループ(男女各1グループ)を対象に、同年齢グループの「夢の小学校」協同制作課題実験4回と、それらのグループを再編成した同性異年齢グループ(3年生2人と5年生2人で構成)の協同制作課題実験4回を実施した。

#### ・縦断的研究の対象

3年生女兒4人グループについては、4年時にも、「夢の小学校」協同制作課題を縦断的に実施した。また同グループの3年時の異年齢グループについて、同様に縦断的に実施した(4年生女兒2人と6年生女兒2人で構成された4人1組の2グループに実施)。

#### ・日常生活場面における観察対象

「夢の小学校」協同制作課題の縦断的研究の対象とした3年生女兒4人について、学童保育における仲間関係を縦断的に観察した。この4人は、1年生から同じ学童保育に在籍

する同学年のメンバーで、学童保育に他に同学年の児童は在籍していないことから、同年齢、異年齢の仲間関係を捉えやすいと考えた。「夢の小学校」協同制作課題でみられた社会的相互作用と学童保育場面における仲間関係との関連について検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 社会的相互作用が児童の拡散的思考に及ぼす効果について

「夢の小学校」について、最初に出された個人のアイデアと、グループによる社会的相互作用を経て制作された作品のアイデアの内容を比較検討することによって、社会的相互作用の拡散的思考への効果について検討した。

各個人が表現した「夢の小学校」のアイデアの内容は、a.「学校の型破り」型(お菓子を持ってきてよい、給食はバイキング、学校の床が全部トランポリン等) b.「ファンタジー・創造」型(魔法が使える、ミッキーがいる等) c.「エコロジー・自然志向」型(動物と触れ合える等) d.「学校の理念」型(自分で教科を選べる等)の4タイプに分類できた。次に、4人の協同過程を経て表現されたグループの作品について、折衷型(各個人のアイデアが盛り込まれたか) 集約型(特定の個人のアイデアに集約されたか) 創発型(個人アイデアにはみられなかった新たなアイデアが創発されたか)の観点から分析したところ、グループの作品のタイプの決定因は、どんなアイデアを持つ個人が成員であるかよりは、社会的相互作用の効果によることがうかがえた。すなわち、集団の相互作用がより協調性を重んじる方向へ働くのか、あるいは、その場の制作活動やことばを介したやりとり遊びを楽しむ想像力が惹起されるように働くのかといった社会的相互作用の質によって、作品のタイプが分かれることが示唆された。

(2) 社会的相互作用の特質の発達的变化、および日常生活場面における仲間関係との関連について

小学校3年生から4年生への社会的相互作用の発達的变化：縦断的検討

3年生から4年生にかけて縦断研究を行った女兒4人グループの協同制作過程において出現した発話カテゴリーの出現率の学年変化について、図1に示した。

グループの個人間の発話数を比較すると、3年生では、メンバーAの「指示」(例：「もうちょっときれいに描いて」)を中心に動き、他のメンバーはBに承認を求めるように「質問」(例：塗ってもいい?)をするといった関係性において制作活動が進められていた。それが、4年生になると、メンバーAの「提案」(例：「黄色にするのはどう?」)「質問」「指摘」(例：「ここに夢の小学校って書かな

いと)、Bの「指示」、Cの「提案」「承認」(例：「いいよ」)、Dの「評価」(例：「ちゃん、すごく上手だよ」)が増加した。こうした発話内容の変化からは、Aが他のメンバーに目を配り、また他のメンバーの意見を聞く姿勢を示すようになり、また、他のメンバーも制作活動に対してより主体的に参加するようになり、特にCはグループの活動をリードするようになるといった、グループのメンバー間の関係性に質的变化が認められた。

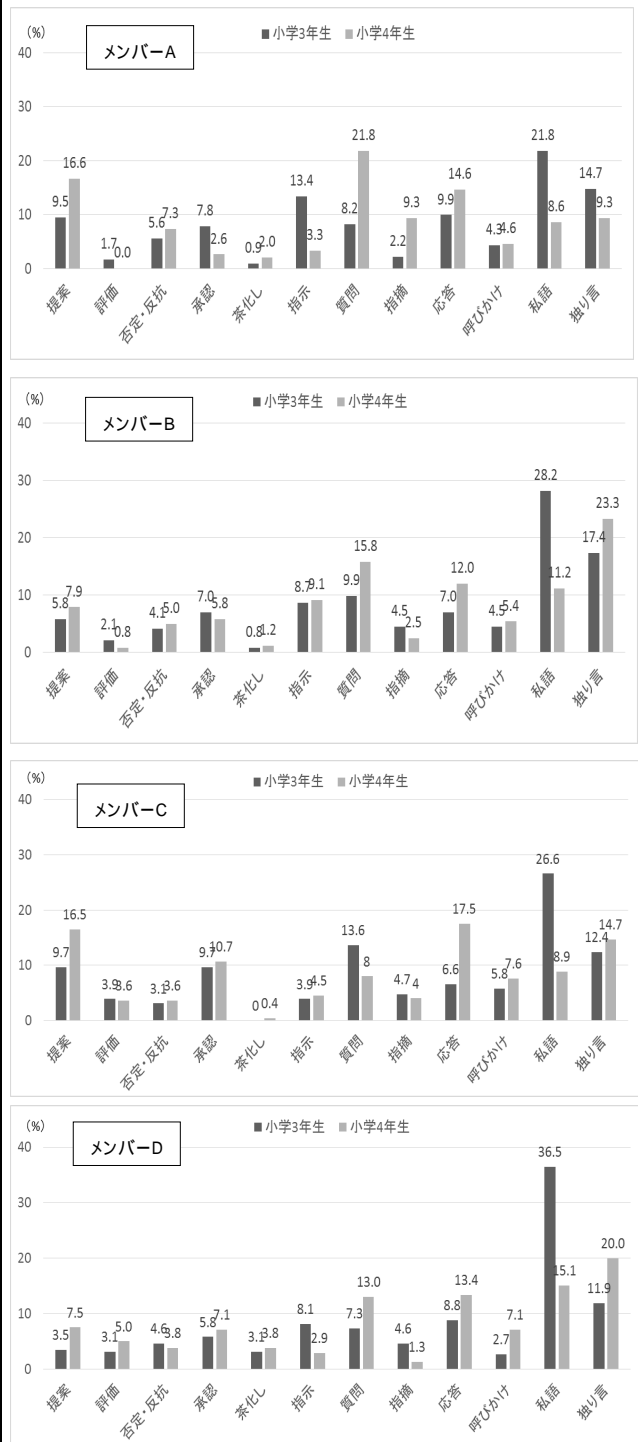


図1 協同制作過程における発話カテゴリーの出現率：学年変化

## 日常生活場面における仲間関係との関連

学童保育場面における4人の仲間関係について観察し、「夢の小学校」協同制作課題から捉えられたメンバー間の関係性との関連について検討した。

学童保育において、1年生の時から同学年は自分たちだけという環境で生活を共にしてきた対象児の女児4人は、3年生まではいつも行動を共にしてきた。そのなかでメンバーAがドッチボールのボールを独占する行為をみせるなど、Aによる主導的な関係がみられた。また4年生の春には、遊びの輪から他児（異年齢児）を排斥するやり方で、4人のグループ関係を維持しようとする様子もみられた。4年生の夏以降、4人の関係性に質的变化が現れる。Aの主導的な関係や、グループから他児を排斥する行動は減少し、遊びによってはAではなくBが主導権を握ることも出てきた。また、Cは同学年の他のメンバーと遊びが合わないことの自覚を指導員に訴えるようになり、同学年メンバーから離れて異年齢児（下学年児）と遊ぶ姿が見られるようになった。

このように、3年生から4年生にかけての、日常生活場面で捉えられた、ひとりの児童が主導する関係から、それぞれの持ち味が出される対等な関係への変化は、実験課題で捉えられた4人の関係性の質的变化と関連していた。こうした仲間関係の質的变化については、9,10歳頃からの、自分の行為や態度に対する他者の反応を取り込んでいくことができる「自己客観視」の獲得や、友だちに対してより内面的な結びつきを求めるようになること等との関連を検討する必要性が示唆された。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

#### 〔雑誌論文〕(計2件)

1. 寺川志奈子 (2018) 自己主張と自己抑制の発達. 小児内科, 50, 412-418.
2. 寺川志奈子 (2017) 思考力の育ちと大人の関わり. 幼児教育じほう, 48, 5-11.

#### 〔学会発表〕(計3件)

1. 寺川志奈子・藤村宣之 (2016) 児童期における重要な他者意識の発達. 日本発達心理学会第27回大会(北海道札幌市).
2. 寺川志奈子・藤村宣之 (2016) 児童期における「重要な他者」意識の発達(2) 小学校中学年から高学年への発達の变化. 日本教育心理学会第58回総会(香川県高松市).
3. 寺川志奈子・藤村宣之 (2017) 児童期における対人関係枠組の多様性とその発達の变化. 日本発達心理学会第28回大会(広島県広島市).

#### 〔図書〕(計2件)

1. 寺川志奈子 (2017) 「仲間とともに自分で生活をつくる」鳥取大学附属特別支援学校・三木裕和(監修)『七転び八起きの「自分づくり」: 知的障害青年期教育と高等部専攻科の挑戦』, pp.196-197.
2. 寺川志奈子 (2017) 「知的障害が疑われる」(pp.50-52), 「母子手帳を忘れた、書いていない」(pp.58-59), 秋山千枝子・小枝達也・橋本創一・堀口寿広(編)『育てにくさの理解と支援 健やか親子21(第2次)の重点課題にむけて』, 診断と治療社.

#### 〔産業財産権〕

##### 出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

##### 取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

#### 〔その他〕

ホームページ等 なし

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

寺川 志奈子 (TERAKAWA, Shinako)  
鳥取大学・地域学部・教授  
研究者番号: 30249297

#### (2)研究分担者

田中 大介 (Tanaka, Daisuke)  
鳥取大学・地域学部・准教授  
研究者番号: 20547947

谷中 久和 (YANAKA, Hisakazu)

鳥取大学・地域学部・講師  
研究者番号: 60548907

#### (3)連携研究者 なし

#### (4)研究協力者 なし